高知県立坂本龍馬記念館だより　2008（平成20）年4月　第65号

高知県立坂本龍馬記念館　The Sakamoto Ryoma Memorial Museum

龍馬のチャレンジ精神燃やし新時代へ！

斬新な企画展・充実の展示環境

「民間で出来るものは民間へ」。「公」から「民」へと吹く指定管理者制度の風の中で、昨年「坂本龍馬記念館」は、一つの試練を体験しました。館の運営管理に関する「公募」という試練です。結果はこれまで通り県文化財団の傘下となったので一見、変化はないように見えるのですが実情はそうではありません。来年4月から5年間の指定管理を受ける中で、多くの約束事を表明しました。龍馬の検証、龍馬思想の普及という使命に向かって、入館者を増やすという高いハードルを越えていかねばなりません。その意味で、今年を"チャレンジ"への第一歩"助走、準備期間"と位置づけ、いくつかの新しい取り組みを始めることになりました。

特別企画展は2本

館の柱となる企画展は、特別展2本と所蔵品展2本を計画しています。特別展は4月から9月までの―人が人を"創る"―「出会いの達人・龍馬」展と10月から翌年3月までの―龍馬精神・そこに原点が―「海援隊約規物語」展です。県下では今年度「花・人・土佐であい博」を開催中です。全て、物事の始まりは人の出会いから。坂本龍馬は"出会いの達人"との呼び名があります。まさにぴったりの企画となりました。"約規物語"もその延長線上にあります。坂本家の家族、血脈その絆の強さに迫ります。

龍馬検定開始

インターネットを使った「龍馬検定・これであなたも龍馬博士」も新しい試みです。初級、中級、上級の3段階で、特に成績優秀者には館より「龍馬知識普及員・SK隊士」の称号を贈り、終生入館無料などの特典も設けます。

「拝啓龍馬殿」を出版へ

「ほいたら待ちゆうき―龍馬―」これは、本の題名です。入館者の皆さんが龍馬宛に書いた手紙「拝啓龍馬殿」12,000通の中から1,500通を選び出し一冊にまとめたものです。手紙に龍馬は答えています。つまり、手紙は龍馬が皆さんを通じて世に送るメッセージと解釈し出版することになったものです。以前、テレビドラマなどで龍馬を演じることによってより龍馬に魅かれたという歌舞伎の市川染五郎さん、俳優の上川隆也さんに龍馬を語ってもらうなどご協力いただきました。幻冬舎より8月出版の予定です。

収蔵庫も完備

一方、龍馬記念館の博物館としての機能を充実させるための作業も着々と進んでいます。貴重な資料の寄託、寄贈が多くなっているだけに、資料の保管管理には細心の注意を払わねばなりません。館の心臓部にも匹敵する温度、湿度調整万全の収蔵庫の設置も決まりました。今年、秋までには完成です。また、重要な資料の展示用に特殊な展示ケース（エアタイト型）も4台用意しました。これで、とかく展示環境、管理が問題だと言われた館の欠点が一応解消されたことになりました。

坂本龍馬記念館はこれから新たな一歩を踏み出します。職員一同、全力で当たる所存です。よろしくお願い致します。

森　健志郎

http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~ryoma/

海援隊旗（二曳きの旗）

「出会いの達人・龍馬」展

●平成二〇年四月一九日（土）～八月三一日（日）
●前期：友情編　後期：恩師編

●趣旨

「天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず」

孟子のこの言葉は、「天の時よりも地の利の方が有利だが、地の利を得ていても人の和には及ばない」という意味である。例えば城攻めの時、チャンス（天の時）を捉えて行動を起こしても、良い場所に築かれた城（地の利）を落とすことはできない。しかし、難攻不落の城も内部の人の気持ちが一つにまとまっていなければ（人の和）、簡単に落とされてしまう。結局、物事を成功させる時に最も大切なものは〝人の和〟ということだ。龍馬はこの言葉を知っていただろうか？龍馬の行動を見ると、このことを十分認識していたように考えられる。

人との出会いがあり、出会いを大切にした結果、人の和が生まれる。龍馬は優れた人の噂を聞くと、その人の元へ飛び込んでいって、知識を吸収した。そうして出会った友人や恩師が、薩長同盟や大政奉還を進める時、龍馬を支えた。まさに龍馬は「出会いの達人」だった。

本展では、前期を友情編とし、西郷隆盛や桂小五郎、中岡慎太郎、三吉慎蔵、伊藤助太夫ら、龍馬を支えた友人との出会いを紹介する。後期では恩師編として、世界の情報を教えた河田小龍や、船中八策の基になった国是七条を教えた横井小楠、大政奉還を教えた大久保一翁や松平春嶽、そして龍馬が最も尊敬していた勝海舟らとの出会いを紹介する。

●内容

本展の中心となるのは、人の和に繋がる「出会い」であるが、天の時・地の利についても資料から見ていく。龍馬の人生を見ると、孟子が挙げたこの三つすべてを味方につけているように思えてならない。

龍馬は元治元年（一八六四）六月二八日に乙女に宛てて、通称「ねぶとの手紙」を書いている。これは、「天下に事をなす者は時期を見て行動を起こさなければならない。」と龍馬の哲学を書いた手紙だ。チャンスというものは、ただじっと待っているだけでは転がってこない。新しい情報を集めて、それを分析して、今だという時期を見極めて行動を起こす。それが大事だと書いている。薩長同盟にしても、大政奉還にしても龍馬は時期を見極めて成功させている。

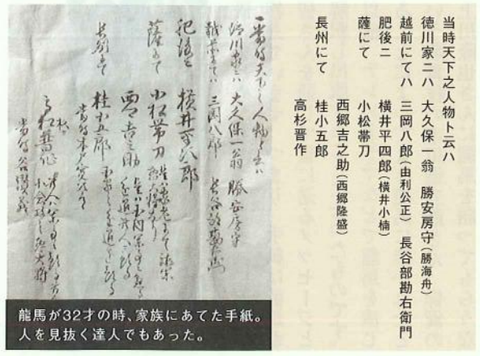
また、地の利のついては、偶然の要素も強いが、常に新しい情報が手に入る場所に身を置いていることが挙げられる。まず、ペリーが黒船を率いて来航した時、偶然にも江戸に居たことが龍馬の人生の転機だといえる。また、土佐へ帰ってからは、河田小龍との出会いがある。当時の日本人で、世界の情報を最もよく知っていたのはジョン万次郎だと思う。その万次郎から話しを聞いた小龍が、偶然にも嘉永七年（一八五四）の南海大地震後、龍馬の家がある上町へ移り住んできた。そのため、交流が生まれ、龍馬は最新の情報を手に入れることができた。ここまでは、偶然の地の利だが、脱藩してからは、自ら進んで、最新の情報が手に入る場所に身を置いている。まずは、世界の情報も幕府の情報も手に入る勝海舟の下。勝と別れてからは、自分たちで情報を得られる長崎を拠点としたこと。

まるで孟子の言葉を知っていて、それを実践しているかのような行動である。最後に、本展の中心となる人の和だが、慶応二年（一八六六）一二月四日坂本権平一同宛て龍馬書簡がある。この書簡は、寺田屋で伏見奉行所役人に襲われたことや、第二次幕長戦争に長州側として参戦した様子などを綴った長文の書簡である。

龍馬直筆のものは行方が分からないが、この書簡の冒頭には、「親類の誰かに見せれば、書き写させて順蔵さん（高松順蔵）へもお回しください」と書かれている。その書き写した書簡が弘松家に保存されていた。現在この書簡は、弘松家から当館へ寄託されている。

この書簡の最後には、当時天下の人物と呼べる九人を龍馬が選んで紹介している。この人選を見るだけで、龍馬の人を見る目の確かさがよく分かる。

当時天下之人物ト云ハ
徳川家ニハ　大久保一翁
　　勝安房守（勝海舟）
越前にてハ　三岡八郎（由利公正）
　　長谷部勘右衛門
肥後ニ　横井平八郎（横井小楠）
薩にて　小松帯刀
　　西郷吉之助（西郷隆盛）
長州にて　桂小五郎
　　高杉晋作



龍馬が32才の時、家族にあてた手紙。人を見抜く達人でもあった。

ここに挙げられた人のほとんどは、一四〇年以上たった現代でも名前をよく知られ、幕末維新期に活躍した人ばかりである。わずか三二歳の若者が、この人たちを見抜いていたのは驚きである。しかも、龍馬は親しく付き合っている人の中から九人を選んで、家族に報告している。今、三二歳の若者に、「日本の中で人物と呼べる人を、自分が付き合いのある人の中から選んでください」と言った場合、一〇〇年後まで歴史に名前を残す人を、一人でも挙げられれば上等ではないだろうか。龍馬の場合、ここに挙げた九人は、たまたま友達だったとかではなく、自分から足を運んで交流した人たちばかりだ。この人脈こそ、龍馬が大きな仕事を成し得た要因だと思う。歴史に名を残す大きな仕事をするには、龍馬自身の才能や努力も必要だが、人との出会い無くしては不可能なことである。

龍馬が挙げた九人を見てみると、やはり勝海舟との出会いが大きな転機ではないかと思う。勝と出会い、弟子になったことで、大久保一翁や横井小楠と親しくなり、三岡八郎や長谷部勘右衛門とも出会った。そして、勝と別れる時に、西郷隆盛や小松帯刀と出会う道筋をつけてもらっている。龍馬は脱藩後最初の手紙で、勝のことを「日本第一の人物」と認めている。

龍馬が最も尊敬していた勝海舟は、「人には余裕というものがなくては、とても大事はできないよ。昔からともかくも一方の大将とか、一番槍の功名者とかいうものは、例えどんなふうに見えてもその裏の方からのぞいて見ると、ちゃんと分相応に余裕を備えていたものだよ」（勝海舟全集一四巻「歴史と人生について」）という言葉を残している。また、龍馬にピストルをくれた長州藩士の高杉晋作は「男子は決して〝困った〟という言葉を発してはいけない」と常々語っていたそうだ。龍馬の人生は挫折の繰り返しだが、苦しい時ほど周囲の人に送る手紙ではユーモアを交えて書いている。いろは丸事件の談判中に家族や寺田屋へ送った手紙がまさにそれに当たる。龍馬はお金に困って借金をする時でさえ、ユーモアたっぷりの手紙を書いている。

龍馬は、天の時を知り、地の利を得、なによりも人の和を大事にした。そして、どんな困難な時でも心に余裕を持つことを忘れない。これが成功を収めた秘訣である。本展では龍馬を支えた多くの「出会い」を紹介していく。

三浦　夏樹

「もう一つの展覧会」展
思い切ったパフォーマンス

4月19日（土）から8月31日（日）まで開催される「出会いの達人・龍馬」展。

この期間中、6月1日からは「もう一つの展覧会」展を同時に2階フロアで開催します。おそらく皆様「一体これは何！？」と一瞬たじろくかも。

龍馬には〝出会いの達人〟という呼び名があります。出会い、出合い、出遭い。人との出会い、物との出合い。であいには様々な形があります。

そこで、坂本龍馬記念館では思い切った演出を試みてみました。「もう一つの展覧会」展を通して、新たな〝であい〟を皆様に体感していただければと思うのです。

2階フロア龍馬の展示の間々にアーティスト14名の作品群が突如として出現します。この一見まるで関係なさそうな展示の相互作用こそが出会いの始まりなのです。

14名のアーティストの方々は、実は過去に館の〝海のみえるぎゃらりい〟で龍馬との出会いをされています。それは、書、絵画、立体、写真など様々な形での個性的な龍馬との出会いでした。今回は「出会いの風強し、天気快晴」のテーマで〝出会いと龍馬〟をイメージしていただき、作品創りをお願いしました。

創る側のエネルギーと見る側のエネルギー。それらが偶然出遭うその瞬間瞬間に新しい出会いが生まれるはずです。どうかこの不思議なであい、あなたも味わってみてください。初夏の坂本龍馬記念館で。お待ちしております。

中村　昌代

「幕末写真館」展を終えて

展示に工夫。写真キャプションに作者の感想入れる

「分かりやすい」と好評 一番人気は、やっぱり「立像龍馬」

昨年12月17日から始まった「幕末写真館」展も95日間の会期を終え無事終了しました。お蔭様で1年を通して入館者の少ない時期ではありましたが、およそ22，000人の方々が足を運んで下さいました。

土佐和紙に大きく引き伸ばした古写真を、1枚1枚パネルに手作業で貼る作業も含め、約3ヶ月の準備期間を経て、前日の展示変え作業が終わった時には清々しい朝焼けを迎えていました。

今回の企画展では、展覧会の試みとして、写真パネルを展示してある傍ら、キャプションと一緒に筆者が写真を見た感想を〝イメージ〟として書き添えてみました。それが果たしてどんな反響を呼ぶのか興味津々でしたが、140枚もある写真とキャプションのあちらこちらに入館者の皆様が立ち止まり熱心に読んでくださっている姿をたびたび見かけたり、アンケートにイメージが面白く印象的だったなどと書いてくださっているのを読むと、文字の形や色など課題はあったとしても、この試みは間違いではなかったと確信できました。もう一つは解説用展示パネルに子供向けの説明を付け加えたことです。わかりづらい歴史の流れを、子ども達にも親しみやすく理解してもらうための試みでした。

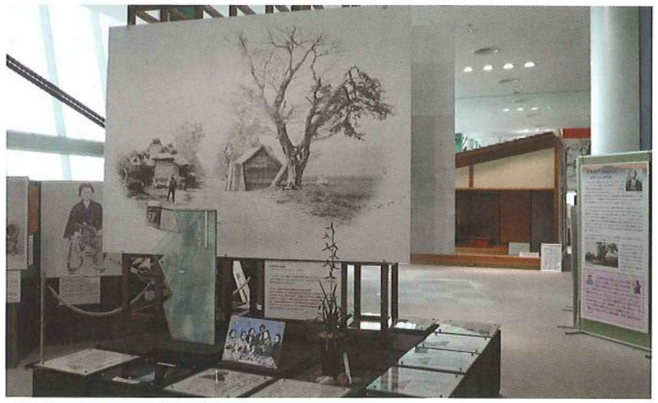
そしてもう一つの話題は、「幕末写真館」展の写真が土佐電気鉄道の車体広告として高知市内を走り抜けたことです。電車の広告を見てご来館くださった方もいらっしゃいますし、「市内で電車を見かけましたよ。」というお声も届きました。ホテルに貼っていただいたポスターやチラシをご覧になって来館された方も数多くいらっしゃり、いずれにせよ、広告・宣伝の重要性は大きく、坂本龍馬記念館は常に動いているということを広報する必要性をこの企画展で実感しました。

龍馬は140年前すでに、誰もが思いつかない遥か彼方の未来に焦点を合わせ、行動していました。当記念館でもこれからは、毎回新しいことに挑戦をしていきたいと考えています。さて、「お気に入りの写真がありましたか？」というアンケートの集計結果（2月29日まで集計分）は、アンケート総数1，257件、順位は次の通りとなりました。

1位：坂本龍馬（立像）227票、
2位：土方歳三（半身）170票、
3位：お龍（若き日）80票、
4位：中岡慎太郎（笑顔）58票、
5位：奇兵隊1（7人）48票でした。

（最後になりましたが、飛騨64号の2ページ「幕末写真館」展の文章中〝下田開港博物館〟は〝下田開国博物館〟の誤りでした。訂正をしてお詫び申し上げます。）

中村　昌代



「幕末写真館」展の「生麦事件の現場」を土佐和紙に引き伸ばしたパネルです。大きさは約2ｍ×3ｍあります。

「幕末写真館」展の展示風景です。至る所に写真パネルを展示しました。

製本作業

～12,000通から3,000通に～

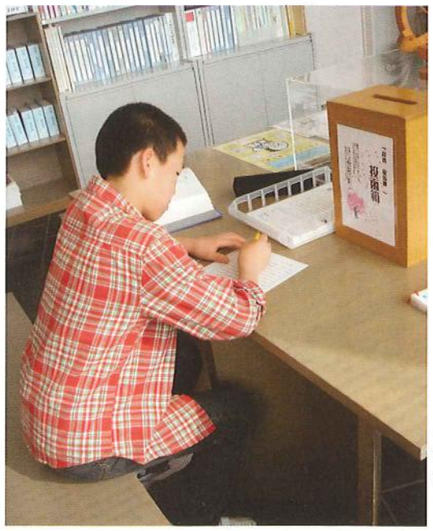
「ほいたら待ちゆうき」

●始まり

2007年6月、図書コーナーで熱心に「拝啓龍馬殿」を読む館長の姿を見かけるようになった。開館してから16年間で寄せられたメッセージは12,000通にものぼる。そのメッセージを読みながらどんどん付箋をつけていく。記念館にある付箋を全部かき集めても足りないくらい…。それが「拝啓龍馬殿」書籍化作業の始まりだった。

●メッセージのデータ化

次の作業は、館長が選んだメッセージを「記入日・本文・氏名・年齢・県」などの項目別に、エクセルで作った一覧表に入力していくことだった。「拝啓龍馬殿」のファイルは全部で30冊。通常の受付業務・事務処理をしながらの入力作業は、思っていたより大変だった。6月はそれほど忙しくなく、入力作業も順調だったが、7、8月になると入館者も増えてきて受付業務だけで手一杯になってきた。そんな中でも、とにかく入力。それに加え、8月の末には「拝啓龍馬殿」が本になることのお知らせと、書籍への掲載・近況をお伺いする往復ハガキの宛名書きが始まった。



●返信ハガキ

ここで、予測していなかったことが起こった。返信ハガキが返ってきた人の中で、本文と名前の掲載をOKと返事してくださった方が9割、イニシャルでの掲載ならOKが1割弱、掲載NGの方は数えるほどしかいなかったのだ。そして、掲載OKを「○」で囲んだ横には「光栄です！」とか「よろこんで！」というメッセージが添えられていた。さらに、みなさん、連絡先として携帯電話の番号を書いてくださっていた。何かと〝個人情報〟と言われる中で、このような返信ハガキがいただけるとは思ってもいなかったので、驚きと嬉しさでいっぱいになった。

10月、全メッセージの入力が終了。選んだメッセージの総数は3,000通弱であった。メッセージの校正や返信ハガキの処理、出版社との打ち合わせをおこない、何となく全体の形が見えてきたのは2007年12月のことだった。

●「拝啓龍馬殿」を本にする理由

「拝啓龍馬殿」に寄せられたメッセージを内容で見ると、龍馬に相談をしに来た人が多いことに気付く。今はもう、ここには龍馬はいないけれど、龍馬の生まれた土佐の地で、龍馬の見た海を眺めると、なぜか悩み事が解決されるようだ。そして、「元気になれた」と書かれたそのメッセージを読んだ人が、また元気になってメッセージを残していく。そんな不思議な連鎖が「拝啓龍馬殿」にはある。これは、来館者の言葉を借りて、生きにくい現代を必死で生きる私達への〝龍馬からのメッセージ〟なのだと館長は言った。「拝啓龍馬殿」を本にしたいと考えたのも、龍馬にはこの不思議なパワーがあると感じたからだった。

●出版社との打ち合わせ

できることなら、3,000通のメッセージ全てを本に掲載したかったが、そうもいかない。せっかくの来館者からの、龍馬からのメッセージを、できるだけ多くの人に伝えるためには、まず書店に並ぶたくさんの本の中から手に取ってもらうこと、そして、買ってじっくり読んでみようと思ってもらい、誰かに教えてあげたいと思ってもらうことだ。一度、視点を変えてみることにした。

〝作りたい本〟を作るのではなく、〝作れる本〟を作ることに。販売価格から、作れる本のページ数を出し、ページ数から掲載できるメッセージが1,500通に決まった。

タイトルは最初、「拝啓龍馬殿～ほいたら浜で待ちゆうき　龍馬」だった。しかし、それでは「ほいたら～」の部分の印象が薄くなり、宣伝などの際にカットされてしまうのではないかと思ったので、思いきって提案してみた。話し合いの結果、タイトルは『ほいたら待ちゆうき―龍馬―～入館者の龍馬への手紙「拝啓龍馬殿」より』となった。

本文のレイアウトも決まった。本のタイトルも決まった。現在は、表紙などのデザインを決める段階に入っている。

2008年8月には完成予定。この本が多くの方の〝生きるヒント〟になることを願って、引き続き、製作作業に取り組んでまいります。

尾﨑　由紀

拝啓 龍馬殿

12月21日～3月20日

84通

ずっと来たかった憧れの土佐にやってきました。青い海と、冬でも明るくあたたかい太陽の光に、心がすーっと開かれていくのを感じます。龍馬もきっとこういう雄大な景色を見ながら、大きな志を育んだのだろうなぁと思いました。国の行く末やこれからの世界のことを見通しつつ、まわりの人達にはユーモアと温かいまなざしを忘れない人柄が、手紙を通じて伝わってきました。これからも、この国の行く末を見守っていてください。２００８年は明るいニュースが１つでも増えますように。

（12月31日　東京都　E・M　女性）

お元気ですか。おかあさまがいなくて、さぞかないでしょう。乙女ねえさんは元気ですか。りょうまさんは、こっちでゆうめいです。でも日本じゅうでもゆうめいです。けんじゅうのうでまえはどうですか。もしうまくなったら、ぜひおしえてください！私はいいだばしにすんでいます。ぜひあそびにきてください。

（1月1日　東京都　M・O　9歳　女子）

龍馬さんが大好きで、何度も高知には来ていますが、この記念館には初めて来ました。とても興味深いものがたくさんあり、これからゆっくり見て回りたいと思います。今、私は龍馬さんが亡くなった歳と同じ33才になりました。今までとは違った感情があります。この年になるまでに色々な事をやってきた龍馬さんと比べ、時代が違うとは言え、私は、国や色んな人達については、あまり考えたことがありません。ただ「すごい」とか「偉い」とか簡単な言葉では言い尽くせない思いが、龍馬さんにはあります。大好きです。

（1月2日　徳島県　T・N　33歳　女性）

一家中で龍馬様のファンです。只今6才なる孫は「竜馬」と名付けられ、毎日「竜くん」の大安売りです。人に好かれ、人を愛せる竜馬になってもらいたいと願います。太平洋を見渡すように、小さな事にこだわらず、大きい希望を持ち続ける人間になってもらいたいです。龍馬様に何とか追いつきたいです。

（1月2日　東京都　M・Y　72歳　女性）

ぼくも龍馬さんみたいになりたいです。いっぱいどりょくして、がんばって、そんな大人になりたいです。お父さんは、ぼくと弟のたくまに名前をつけるとき、龍馬さんの字をとって、ぼくには龍馬さんの「龍」をとって「龍将」という名前をつけて、龍馬さんの「馬」は弟のたくまの「拓馬」です。ぼくは龍馬さんみたいになりたいです。

（1月3日　山口県　R・K　10歳　男子）

元気百倍りょうまアンパンマン！
（3月16日　高知市　K・O　男子）

桂浜に来るのも、早いもので四回目になります。龍馬先生の足下に来るたびに、その時々の自分の生き方を考え直す時間にさせられます。今日は、今年の五月に結婚する彼女と来ました。ボクの大好きな坂本龍馬先生と桂浜を見てもらいたかったからです。日本初の新婚旅行をした龍馬先生の元へ、新婚旅行のかわりに婚前旅行をやってきました。幸せな気持ちで一杯です。これまでは桂浜へ行くのも一人でしたが、これからは二人で来ます。再来年には三人になっているかもしれません。これからもずっと桂浜で龍馬先生とお話しに来ます。「拝啓龍馬殿」の書籍、楽しみにしてます！

（1月3日　愛知県　Y・M　33歳　男性）

ここは館長の部屋　森　健志郎

洗濯しよう

有名な龍馬の手紙（文久3年、姉、乙女宛）に通称「日本の洗濯」というのがある。外国商人と結託して悪事を働いている幕府の役人を摘発し、国の正しき道を取り戻す手段として〝洗濯〟という言葉を使っている。

そして、いまや洗濯大流行。〝国民連合せんたく〟、〝せんたく議員連合〟・・・それだけ世の乱れようが深刻ということになる。

館にはずばり「日本の洗濯板」が、ショップ商品として並んだ。昔の洗濯板の小型だがしかし、使おうとすればハンカチなど小さいものには対応できる。本来は葉書として制作したものである。アイデア商品の範疇だろう。

「洗濯ねえ」。龍馬の海を眺めながら、口に出してつぶやいている。

海は白波をかんでいる。春、間近の海は、穏かなようで思惑ありげにうねっていた。水平線は時折かすむ。すっきりしていたかと思うと、一瞬のうちにぼやけている。先日は中国から黄砂が飛んできた。これがかなりの濃度らしく、神秘的というより環境問題のほうが頭をよぎった。それにしても、海に降る黄砂。〝黄色の幕〟がブルーの海に消えていく。どちらの色に染まるのか。つまらぬ事を考えている。

「センタクかあ」。地球のセンタクが始まっている気がする。自然界も人間界も。アメリカもイラクも日本も四国も高知も、龍馬記念館も、己の心も　全部「洗濯ゼヨ」。

今回、初めて高知へ、龍馬記念館へ来ました。今年五月に結婚する彼と来ました。彼は龍馬さんの大ファンで毎年一人で来ていたそうで、私を連れて行きたいとのことでした。これから龍馬像を見に行って来ます。また二人で来ます。歴史が苦手な私ですが、ここへ来てちょっと坂本龍馬のイメージが変わった気がします。とても人間味あふれるあたたかい人だなぁと思いました。

（1月3日　岐阜県　A・I　33歳　女性）

やっと来ることができました。龍馬から見て今の「日本」はどうですか？みんなそれなりに幸せに暮らし、みんな平等に生活し、どんどん生活は豊かになっています。・・・でも何か無くなっているものもあるような気も…。これも「時代」というものなのでしょうか？今、僕は僕なりに考え、生活しています。龍馬とは違う生き方をしていますが、「幸せ」「楽しい」をモットーに生きていこうと思っています。男として、本能的にあなたをかっこいいと思います。では。

（2月2日　和歌山県　K・T　30歳　男性）

「仰ぎ見し　龍馬の像の　偉大さに　己が器の　小ささを知る」

今の政治化は一度桂浜に来て、龍馬の像を仰ぎ見ればいい。そしてもう一度自分のやっていることを考えればいい。

（2月5日　M・K　男性）

自分は13歳のとき、司馬遼太郎の「竜馬がゆく」を読み、あなたの人生にふれることで人生が変わりました。それまでは単にボーっとしているだけの人間でしたが、日本のために命を捧げ、日本の歴史を変えたあなたを見習い、自分の人生を意味のあるものにしたいと願い、日々努力するようになりました。自分は今、大学院生で、日本外交の研究をしています。日本が世界の中でどうあるべきかを考え、日本の未来を築く一助となりたいと思います。

（2月11日　東京都　F・N　男性）

こんにちは。やっとあなたに逢いに来ることができました。今日は晴天で、桂浜の眺めは最高です。あなたもこの海を目を細めて眺めていたのかなぁと思うと、胸が熱くなります。実は、昨日から新婚旅行で大好きな主人と来ています。お腹には7ヵ月になる赤ちゃんがいて、先日、男の子だということが判明しました。あなたのような大きな人間に育ってほしいです。あなたが新婚旅行で行った霧島にある高千穂の峰は、私が子供の頃、家族で登ったり、学校の遠足で登った山です。私と逆ですね。赤ちゃんが生まれて大きくなったら、また家族で逢いに宮崎から来ますね。今日はありがとう。

（2月15日　宮崎県　K・S　28歳　女性）

太平洋を見て育った貴方が夢みた世の中、本当はどんな世界だったのでしょうか。今、貴方が生きておられたら「まっこといかんぜよ」と言いそうな気がしています。でも、私達が今こんなに自由に暮らしている。その一つに貴方の生き方が活かされていることは間違いありません。ありがとう、龍馬さん。

（2月19日　静岡県　M・N　60歳　女性）

人生の大きな決断をする前にお会いできうれしく思います。私は世界を〝せんたく〟するため、国際的に活躍する会計士になります。

（2月24日　千葉県　M・T　27歳　男性）

志士というのは何だったのでしょう。どうすれば、現代に生きる私も志士になれるのでしょう。龍馬さんの人生は、それを俺に語りかけてくれます。太平洋の海が語りかけてくれます。また来ます。必ず。その時までに、もう少し志士の心で来たく思います。志士とは誠にアツイ！

（2月25日　香川県　R・K　29歳　男性）

＊＊＊ 編集者より ＊＊＊

2008年も元旦からたくさんの方にご来館いただきました。前項にもあるように、今年の夏には「拝啓龍馬殿」が一冊の本になります。これまでにメッセージをお寄せいただいた方の中には、掲載の可否をお伺いするハガキが届いた方もいらっしゃると思います。最近では、そのハガキが届いたことをきっかけに、再び記念館を訪れてくださっている方も多いようです。そのときに、再度寄せてくださったメッセージを読ませていただくことが、編集作業の励みとなっています。発刊までもうしばらくお待ちください。

龍馬検定

前号でもお知らせしたが、いよいよインターネットによる龍馬検定が始まる。まずは四月から初級編がスタートする。一回三〇問だが、何度か楽しんでいただけるように、問題数は三倍ほど用意している。毎回少しずつ問題が違っているという趣向だ。

中級編は七月に立ち上げ、上級編は十一月立ち上げになり、それぞれ検定料が必要となる。初級編は無料なので何度でもチャレンジしていただきたい。初級編で腕試しした上で、必要な参考書を手元に置いて中・上級編を受けていただきたい。

現在、ほとんど問題が完成している初級編は、関係者に試しに受験してもらうと、「初級にしては難しい」という感想が帰ってくる。これは、インターネット検定であるため、何を参考に答えても構わないということが関係している。

問題の傾向は、初級編は龍馬の生涯と一般的な関係者に関する問題が中心。中級編になると、龍馬の手紙からも出題する。さらに、上級編では、龍馬ゆかりの地について、ある程度以上の知識がないと難しい問題も含まれる。

いずれにしても、この検定によって、龍馬について興味を持ち、より詳しく調べるきっかけになれば幸いだと思う。

三浦　夏樹

ショップ充実へ

平成18年4月新しく誕生したミュージアムショップに新商品が続々誕生しています。

以前からご要望の多かったポストカード（1枚100円）も20種類となり充実！また4月からは、龍馬ボールペンとポストカードがセットになった【ボールペンセット（300円）】が新商品として加わります。ぜひご来館いただき〝海の見えるぎゃらりぃ〟から、旅の思い出を大切な人、親しい人に届けてみませんか・・・。

この他にも、携帯ストラップ・めがねケースなど企画中です。ご期待くださいませ。

市川　恵子

■平成十九年度第二回坂本龍馬運営協議会

指定管理者 新たな取り組みへ

第二回運営協議会は二月四日に開かれました。館の運営状況、平成二十年度事業計画についての説明があった後、指定管理者制度への対応について森館長から説明があり、活発な意見交換がされました。

指定管理者制度が導入されて二年。今年度六月には当館の管理・運営者を公募することが決まり、九月に県は公募要項を発表しました。十四社・団体が名乗りを上げた後、当館を運営している高知県文化財団と民間業者が正式応募。その結果、十二月には同財団が指定管理者として現行運営することが決まりました。

運営協議委員会はもちろん世論からも今回の公募への疑問や心配の声が出ていましたが、今後五年間は続行という形で落ち着きました。しかし、五年後の年間入館者十五万人をめざして、記念館はより質の高い人々の関心を集める企画展、県民サービスを求められています。スタッフだけでなく外部の協力を得ながら前進するのみ。"龍馬的な生き方"を提示考察する場として記念館への期待が高まっていることを確認した会となりました。

前田　由紀枝

熱心な討議がなされた運営協議会

『近江屋対談』順調、紙芝居も

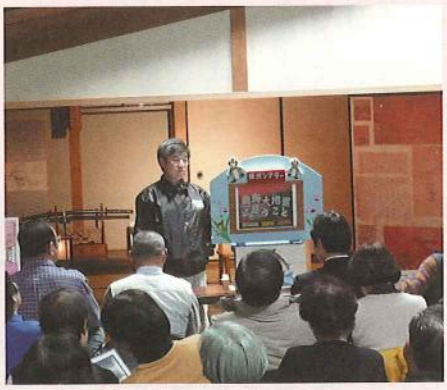
昨年十一月十五日から始まった「近江屋対談」は毎月一回開催し、好評をいただいています。今年からは毎回、対談前に桂浜水族館課長・丸林友文さんによる桂浜の民話や魚たちの紙芝居が加わることになりました。板木が打ち鳴らされ「紙芝居の始まり、始まり・・・」ということで、近江屋での時間が始まります。

十二月は渋谷雅之先生（徳島大学名誉教授、前徳島大学副学長）による「古写真で探る幕末の秘密!」。有名な龍馬の写真をめぐって渋谷先生の話は尽きません。リクエストに応えて二月には「古写真は語る」も開催しました。

一月は舞台「そして龍馬は殺された」で龍馬を演じた俳優・泉堅太郎さんとミュージカル「龍馬!」を一年間上演する愛媛県の坊っちゃん劇場支配人・山川龍巳さん、そして森館長の三人が熱く龍馬を語りました。

今後も毎月一回開催していきます。お知らせはホームページや新聞などで。詳細は当館にお問い合わせください。

前田　由紀枝



紙芝居をする丸林友文さん

入館状況

2008年3月20日現在（開館以来5,926日）

◆総入館者数		2,115,432人
◆2007年度最多入館	5月4日	2,707人
2007年度最少入館	12月19日	50人
2007年度1日平均入館者数		333人
◇最多入館	1993.5.3	3,700人
◇最少入館	2004.10.20（台風のため）	8人

編集後記

「指定管理者、公募」が館にとって大きな節目になった。一つギアが入ったように思う。少ないスタッフで可能な限りのチャレンジである。「飛騰」の編集にも、全員が関わりあう姿勢がじわり見えてきた。新しい見方、考え方が誌面に反映されるのが、進歩の第一歩だと思う。締切日前に原稿が上がっている。この気持ちがたまらない。「飛騰65号」はそうした意味で思いのこもった"記念号"になっている。

（モ）

館だより"飛　騰"第65号（年4回発行）　表紙題字：書家 沢田 明子 氏
発行日　2008（平成20）年4月1日
発　行　高知県立坂本龍馬記念館
〒781-0262 高知市浦戸城山830
TEL（088）841-0001　FAX（088）841-0015
http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~ryoma/
「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間　9:00～17:00　年中無休
入館料　一般400円・高校生以下無料
（特別企画展開催時は別料金）

館だより「飛騰」は、郵送料のみのご負担でお届けいたします。ご希望の方は、90円切手5枚をお送りください